

大学入試センター研究紀要

論文抄録

No. 7

共通第1次学力試験からみた大学・学部の出願に関する 決定過程とその成否

鈴木規夫 1984年3月

一般に入学試験においては、どのような試験問題が適当であるかあるいはどのような受験生を入学させるべきであるか等の、いわゆる試験実施者側からの立場での議論は多く行われているが、逆に受験生がどのような意識で入学試験に取り組んでいるか等の受験生側からの立場での議論は比較的少ない。

ここで紹介する論文は、受験生側からの立場で、昭和54年度から実施された国公立大学の新しい入学者選抜制度において、志願者が志望する大学・学部をどのような判断基準により決定したかを分析したものである。分析にあたり、大学・学部決定のための判断基準として、共通1次試験の得点と志願者が共通1次試験の出願時に申請した志望大学・学部および実際に第2次試験で出願した大学・学部の合格者平均点との差の情報（受験判断値、受験決定値）を導入した。また、志願者の行

動として、志望どおりの大学・学部を受験したグループ（正統群）と志望を変更して、受験したグループ（慎重群、挑戦群）の3群に分類した。そして、これらの群と受験判断値および受験決定値との関係から評価を加えた。

分析の結果、志願者は概ね成算のありそうな行動をとる傾向が強いことが示唆された。この背景には、合否の結果に対して確からしさの見通しに立っている何かが存在している訳で、たとえば受験産業などにより大学・学部の合否に関する資料が豊富となり、合格可能性の判断が容易になったこと等が挙げられよう。

しかし、得点別に分析してみた場合、かならずしも成算のありそうな行動をとらない得点層のあることも分かった。この層は、得点が中の上位にあたる層である。これより低い得点層では、比較的同じ合格者平均点をもつ大

学・学部を受験する傾向が強いが、この層からは高い合格者平均点をもつ大学・学部を受験しようとする傾向が強

くなり、危険性を受容した行動を取り始める。この意味で、中の上位の層は丁度悩める層でもある。